

になつて、匈奴が連合體の名前として呼ばれるようになったものではないか、と推論されたものである。

第六の「匈奴史雜考」は匈奴人の經濟生活、建造物、匈奴時代の交通、人口、法律、慣習等について詳細に論じられたもので、就中甌脱に關する考究は極めて重要である。

以上が本書の極めて大まかな内容であるが、よく著者の温健確實な學風を反映して後學のため、どれ程蒙を啓いてくれるものであるかわからない。第一の「南匈奴に關する研究」は多少問題のアクセントが片寄りすぎたのではないかとも思われるが、著者が斷つて居られるので謂わずもがなの希望であるが、それが中國古代史形成の上でどの様な役割を果していたのかが一層明かにされたらと思わなれないでもない。遊牧民族と農耕民族との關係についても、遊牧民族の農耕社會侵入については説かれる通りであるが、匈奴に關する限り和平を求めたのは食糧難の時に限ると申されたことに首肯できない。これも大きな原因ではあるが、中國側からの賜與という點に關して一人當りにすれば年絹織物僅か三四種弱と云われる、とすればその殆どが支配者の手に渡つたであろうから、實は箇に歸し寢は衆に歸すということから考へて中國側に和平を求めるのは強ち匈奴の食糧難の時だけとは限らないのではなからうか。むしろ兩者間の力關係、或は遊牧民族内の權力構成、秩序の面に和平、侵寇の原因は求められるべきではないだろうか。なお人種體型の問題についても多くの問題が残つていて、今後アジアの地において多くの匈奴人骨の發見を俟たねばならないが、廣義狹義の匈奴の使い分け、支配被支配種族間の人種的社會構成的關係等々多くの問題が残されているし、匈奴の名稱についても匈奴皮に關する記載がトータムとして重要な物

である限り他に何らかの記載が残つていて然るべきではなからうかとも思われるが、こゝにも申される通りなお問題は殘されている。なおいろいろ／＼お伺いしたい問題もあるが、かつて先生の講筵に侍して次々と展開される明確な考證と理論につく／＼學問の深さの測り知れないことを嘆じたことであつたが、今こゝに淺學の蕪雜の言葉を列べて却つて先生の眞意を誤り傳へることを恐れるものであるが御寛恕を乞ひつゝ紹介を終りたいと思う。本書所收の諸論文は昭和八年以來の既出の論文を大部分基にされたものであるが極めて注意深く手を加えられてある。その一々は申し述べなかつた。匈奴史研究今後の課題はなお多い。匈奴史のみでなくアジア遊牧民族史の持つ歴史的意義はまた餘りにも大きい。今後の御教導と御研鑽を祈つてやまない次第である。(林 章)

遼金の佛教 野上俊靜著

昭和二十八年九月五日 平樂寺書店發行
A5版 三三三頁 定價五八〇圓

本書は大谷大學教授野上俊靜氏が、二十數年來專攻の遼金の佛教に關して「大谷學報」「東洋史研究」等の専門學術雜誌に發表されたもの十六篇を収録したものである。

この書物を見ても感ずることは、羽田亨博士の序に「遼金時代に佛教の流行したことは、今も滿蒙華北の諸方に、當時の堂塔伽藍が遺存したり、丹藏・金藏と稱する一切經の存在が認められることなどに依つても想見し得られる。それにも抱らず、その眞相を今日に傳へる記録の類は甚だ乏しく、僅かに諸書中に散見する断片的の記事を拾ひ集めて、その有様を推知する外なく、例えは僅かの鍵を

利用して難題の謎を解くようなもので、その探究に従事する人々の苦心は、想像に餘りがある」とある如く、根本となるまとまつた史料なく、史料の集收やその取り扱いに多大の苦心を拂らわれ、非常に困難な仕事をこゝまでなしてげられたことである。

遼の部八篇・金の部八篇よりなる。

遼代篇

「遼朝と佛教」(昭和七年『大谷學報』一三卷四號)は佛教側の史料と「遼史」・「契丹國志」その他一般歴史側の材料を涉獵して遼朝二百餘年に於ける主として朝廷と佛教との關係を考察されたもの。

「遼代に於ける佛教研究」(昭和八年十二月、MAYURAI)は文献の記載するところによつて、遼代に成つた佛教的著作を列擧して、その異同及び現存するか否かを考へ、現存するものには、その内容及び著者の略傳を紹介され、結語として遼代に於ける佛教研究は、一般の想像以上に殷盛なもので、その中心は華嚴教學にあり、密教の再興されたことは特筆さるべきものであつて、淨土思想・律の研究も亦盛んで、かゝる傾向は華嚴の圓融無碍の思想による抱擁の性格の現れで道教・儒教までも抱攝せんとする傾向を辿つたとされている。塞外の異民族國家である遼に華嚴系の密教が再興したことは、五代宋初の南唐に華嚴の教義を禪に實踐する法眼宗の榮えたのと對

象されて興味深い。

「龍龜手鑑」(昭和十二年二月)は「龍龜手鑑」の出來るに至つた背景の一端及び同書の來歴・版本の概略を述べられたもの。

「遼代社會に於ける佛教」(昭和九年五月「史學研究」五卷三號所收)は遼代に於いて僧侶の社會的地位の高かつたこと、寺院建立の盛んであつたこと、契

丹開闢傳説に觀音信仰の結びついておること、その他、佛誕日の行事・佛裝・火葬などの事實を明かにして、契丹國家に浸潤した佛教の様相を示されたもの。

「遼代燕京の佛教」(昭和十三年十二月「支那那佛教史學」二卷四號)は寺院・佛塔の創建・古寺の重修復興、及び僧侶の活躍の上から遼代燕京佛教界の大勢を考察し、その殷盛な様相を指摘されたもの。

「遼代の邑會に就いて」(昭和十四年二月「大谷學報」二十卷一號所收)は専ら金石文を縦横に驅使されて、遼の時代多數の邑會が結成されて、佛教信仰の普及に大なる役割を演じたこと、邑會は大略遼國內の華北の地、即ち燕雲十六州地方のみに存したこと、邑會の典型的なものとして千人邑について述べておられる。

「契丹人の佛教」は概説的に、たとえ遼佛教が本質的には漢人佛教の域を脱しないものであつたにしても、佛教信仰が本國人たる契丹人の間にも廣く深く浸透していたことを述べておられる。

「遼代佛教に關する研究の發展」(昭和十二年十二月、支那那佛教史學一卷三號所收)は著者が昭和十二年十二月までのこの方面の研究に専心された成果がよくわかる。

金代篇

「金帝室と佛教」(昭和九年一月、大谷學報一五卷一號)では金帝室と佛教の關係をのべ、金朝廷の佛教に對した態度には、ほぼ二様のものがあり、爲政者としての金帝室は佛教を客觀的にながめ、之を行政的に取扱ひ、教團の秩序を確立し、教團を肅正淨化せんとして、金國の指導理念が女眞中心主義と中國的王道仁義の教である以上、佛教の發達・佛教信仰の弘通を積極的に願うものでなかつた。しかし個人としての金朝諸帝は佛教を尊崇し、佛教に保護を與えた

と結論されている。

「金季屏山放」(昭和十年十月「大谷學」)は李屏山の傳、李屏山の撰文著書、その代表的のものである。「諸儒鳴道集說」の諸版本及びそれによつて窺知し得る屏山の思想を攷究され、その思想は華嚴の圓融無碍の教示による儒・道・佛の三教一致の説であり、かゝる三教調和の理論により宋儒の攻撃論に對し痛烈に反駁を加えたことを論述されている。

「金の財政策と宗教教團」(昭和十四年八月「東洋」)には、金は北宋及び遼より繼承した膨脹せる宗教々團を、財政上大いに利用し、一時的財政難を免れ得たこともあつたに違ひないが、既に低級化し墮落しつゝあつた宗教々團は、國家の財政上に利用されることにより益々墮落し、尤も大定五年以後に於ける世宗の如き、その非を悟つて斷乎かゝる悪政をやめ、進んで宗教界肅正工作に乘出した賢君もあつたが、所期の目的を果し得なかつた。章宗時代後半以後に至つては、國威の失墜とともに、國家の財政上に於ける宗教々團利用は益々著しくなり、より一層華北漢人の宗教々團は腐敗し、宗教信仰は卑俗化して邪信化していったことを論述されている。

「二稅戸」(「學報」廿二卷三號所收)には、二稅戸とは遼代民戸の一種であつて、その有する二元的納稅の義務から「二稅戸」なる名稱が生じたのであり、且遼國滅亡に際して、契丹の宗室貴族關係の二稅戸は解消せられて、獨り寺院所屬の二稅戸のみがつぎの金代に繼承せられて殘存することとなつた。しかるに金代まで殘存した寺院所屬の二稅戸は主として寺院僧徒の壓迫によつて、既に二稅戸本來の性質を消失して、多くその奴隸と化してしまつていたのであり、當時一部寺院の豊かな經濟力は、かゝる二稅戸の所有によるこ

とは云うまでもない。しかもかくの如き二稅戸を所有していた寺院は、殆んど例外なく遼代以來のもので、契丹人の居住する地域にあつたから、その存在は社會經濟的問題の外に、民族的政治的問題にもからんで來たものの如く、遂に金の世宗・章宗による二回の二稅戸解放が斷行されるに至つたのであり、章宗の解放により、二稅戸は全く解消されてしまつたと結論されている。

「全眞教」(「支那佛」)は全眞教が異民族國家金王朝の統治下に悩む漢人社會の必然的要求によつて生れ發展したものとされ、異民族の國家に仕えることを潔しとせず、自ら野にあつて時の政治・支配者に對する不満を別途にはらさんとする行きかたとされている。著者も附記されているように吉岡義豐氏の近著『道教の研究』に全眞教成立に關する詳細な論考がある。

「宋人の見た金初の佛教」(昭和廿七年「佛敎史」)は「松漢紀聞」中の佛教に關する一文をとり出して考察を加えておられる。

「金代の佛教に關する研究について」(昭和十四年七月、支那)

「胡族國家と佛教」(昭和十八年六月、「眞宗」)

とをとりあげて、概説的に胡族國家に於いては、佛教は極めて濃厚な國家的色彩を有し、國家或は皇帝に、直接的に役立つ意味に於いて、その存在が許され、且信仰が強要されていたとされている。

遼・金時代の佛教について眞正面から取組まれたのは、今まで著者をおいて他になく、最初に述べた如く史料の集收等困難の中を、遼・金時代がまとまつて本書にあらわされたことは學界の慶事であるとともに著者の功を讃えたい。一言欲をつけ加えると、遼・宋の境に屹立する五台山は唐・宋を通じて佛教徒の第一の靈場であるが、これと遼との關係はどうか、こゝらに華嚴秘密教との關聯はないだ

らうか、又金代にはどのようなようになっていたかについても何にか資料がないだろうか。(塚本 俊孝)

George Vernadsky: *The Mongols and Russia*, 1953, Yale University Press.

第二次大戦中、私達は交戦面を除いては外國との直接交渉を断ち切られてしまったので、心ならずも海外で發表された諸研究を參看する機会を得なかつた。然し終戦後十年の今日では略々戦前の様之等の諸研究を目睹する事が出来る様になったのは何としても喜ばしい限りである。戦前から蒙古史について多少關心を持っていた私は、最近はからずもこの方面の權威者であるアメリカのエル大學教授ジョージ(ギオルギイ)ヴェルナドスキーの三部作ロシア史の中、*The Mongols and Russia*, Yale University Press, 1953 by George Vernadsky を入手したので茲にその内容を紹介し聊か批評を加えたいと思う。

ヴェ氏には別に一九二九年に刊行され、一九五一年までに十七版を重ね三度増訂された矢張り同大學出版の *A History of Russia* があるが、これは最近二冊本として邦譯上梓されている。

さてヴェ氏の三部作ロシア史の方は名稱は同じであるが、前者より餘程詳密だ。

A History of Russia. I. Ancient Russia, II. Kievan Russia, III. The Mongols and Russia

となつてゐる。第一部古代ロシアではロシア史の原始時代から九世紀の北歐人の侵入までが扱われるが、著者はこの古代の背景を考古學者或は古代史家としてでなく、ロシア史家として扱つてゐる。即ち

ロシア史の有機的一部分としてである。次の第二部キエフ・ロシアでは北歐人の渡來から蒙古人の侵入迄の時代が扱われる。此時代は古代キエフ以前ロシアよりも可成りよく知られてゐる。そして重要な證據である當時書かれた文書があるが、これは同時代の西歐の研究に役立つ文書に較べれば僅かである。

第一部古代ロシア、第二部キエフ・ロシアは手許にないので直ちに第三部蒙古人とロシアに移ろう。

第三部の内容は五章に分れ、第一章蒙古人の征服、第二章蒙古帝國、第三章金帳汗國、第四章金帳汗國の崩壞とロシアの復活、第五章ロシアに對する蒙古人の影響である。そして附録として略號表、史料表、書籍解題、家系表(チングス汗家、ベルシアのイル汗家など)が加えられ、更に事項、人名索引、引用著者索引と五葉の地圖が添えられてゐる。

本書述作の趣旨は序文に著者が云つてゐる様に、蒙古時代のロシア史ではなく同時代のロシアと蒙古人との相關關係を明かにするのであつて、又その點から蒙古人治下のロシアの社會、經濟、文化生活などの面については言及されていない。

私はロシア史の専門家ではないので、ここではチングス汗時代を中心として、これについてのヴェ氏の見解に二、三の論評を加えたいと思ふ。

先ず第一章第一節の蒙古人伸展の世界的様相の中で、ヴェ氏は十三世紀初頭に蒙古人の中に突如として攻勢的エネルギーが爆發したのは、依然として心理的謎であると述べてゐるが、これは唐代に漢人文化が頂點に達し爛熟頽廢の結果、これまで漢人に抑えられていた中國周邊の弱小民族がその勢力を擡頭して、先ず鞏鞏は渤海を興